

## 再びハンサリムを宣言しつつ

—ハンサリム宣言二〇周年に寄せて

一本の若木がその身でつくった木陰の中に  
疲れた命たちを喜び休ませていくまでには

何回の春と秋を送らねばならないのか

よちよち歩きを始めた赤子が

その胸に抱いた存在の懐かしさで

眠れぬ夜を明かすまでにはどれほどの時間が流れねばならないのか

今日

ハンサリム宣言二〇周年

一番初めのその種子はいまどのぐらい育ったか

宣言とは

言葉の種子を蒔くことだ

ぼくの胸ときみの胸

世の中のそのすべての胸に言葉の種子を芽生えさせることだ

たんぽぽの胞子のように広がっていき世界中にいっぱい花咲かせることだ

水が一滴大洋に落ちると

その海の嵩と広さと深さと温度が変わる事実を知れば

一つの宣言がどのようなにして混沌の中の道標になるかも分かる

そのとき、

ハンサリム宣言を初めて世に発表したとき

共産党宣言よりもっと意味ある宣言だと胸ときめいた

どちらも飯が世の中心だと明かしたが

共産党宣言は飯の中の汗粒を見て

その飯を均しく分かつ世を目指し

ハンサリム宣言は飯の中のハヌル（하늘、天、신、神）を見て

飯を奉じて生かす世を創ろうとした

文明の冬の訪れに備えて

飯を奉じて生かすことが土を奉じて生かすことであり

世も奉じ生かすことであることを知らしめる

ハンサリム宣言が初めて世に知れ渡ったとき

それは新しい開闢を待っていた人たちに

新しい天と地を開く知らせ、新しい希望だった

その宣言によりわれらは、各自ときめく夢一片を再び持てた

そのようにハンサリム宣言はこの地に生命運動の道を照らす灯であった

そして今日その宣言の二〇周年

この場所から再び顧みるものは何か

ついに今われらはその予感していた冬の入り口に立っている

いかにこの極寒の冬をしのぎ抜くのか

次に迎える季節が果たして春なのか何かわからない

真つ暗な闇に向かって立っている

飯の独占と商品化は一層深化し

病んだ飯で世の病は一層深まった

飯の中のハヌルを見ることができず

われらの中のハヌルが一層暗くなった

一時代を覚醒した宣言の気概はしおれ  
言葉はもうその力を失い訥弁になった  
われらが失くしてしまったものは何で  
また忘れてしまったものは何か

もう一度飯だ

もう一度飯の中のハヌルだ

もう一度飯を奉ずることと生かすことだ

もう一度奉じいたわる手だてを

地を踏み、胸を開く手だてを

もう一度祈る手だてを学ぶことだ

厳寒の冬の前では

凍てついた胸を抱き合って溶かし

飯を奉じ分かちつつ新しく春に備えなければ  
その道を再び宣言しなければ  
共に生き、大きく再び生きる道を

宣言は時代の魂を表わすこと

そうしてもう一度ハンサリム宣言だ

ハンサリム宣言二〇周年の今日

それゆえわれらのなすべき最初のことは

ハンサリムを再び宣言することだ

飯を奉じ生かすことが

ハヌルがハヌルを奉じ生かすことであることを

野と台所が手を取り合う一椀の飯の愛を

その一椀の飯で築き上げる平和を

一椀の飯にこもったハヌルで開いてゆく開闢を

共に抱き合う革命を

ぼくときみの胸

まだ温もりの残るこの世のすべての懐の中に  
ハンサリムの種抱き  
再び青々と芽生えさせることだ

二〇〇九年十月二十八日 ハンサリム宣言二〇周年に

如流 ヨリユウ  
李炳哲 イビョンチョル  
奉献